

# 訓讀説文解字注（四）

森 賀 一 恵

富山大学人文学部紀要第 70 号抜刷

2019年2月

## 訓讀說文解字注（四）

森 賀 一 惠

「訓讀說文解字注（一）」「訓讀說文解字注（二）」「訓讀說文解字注（三）」に續いて、段玉裁『說文解字注』第十二篇上を訓讀し、注を附す。

### 凡例

既に出版されている『訓讀說文解字注』金冊～匏冊に倣う。説解原文に（一）（二）（三）等の漢數字の番號を附したのは、段注の入るべき箇所を示したもので、説解原文、段注に1)2)3)等のアラビア數字の番號を附したのは、訓讀者注の被注箇所を示したものである。

### 十二篇上（耳部、叵部）

#### 耳部

耳，主聽者也<sup>(一)</sup>，象形<sup>(二)</sup>，凡耳之屬皆从耳，

耳，聽くを主どる者也，象形，凡そ耳の屬は皆な耳に从ふ，

（校）小徐、大徐「者」字無し。

（一）「者」字今補ふ。凡そ語に「而已」と云ふ者は之を急言すれば「耳」と曰ふ。古音一部に在り<sup>1)</sup>。凡そ「如此」と云ふ者は之を急言すれば「爾」と曰ふ。古音十五部に在り<sup>2)</sup>。『世説』に「聊復爾耳（聊か復た爾る耳）」<sup>3)</sup>と云ふは「且如此而已（且く此くの如き而已）」を謂ふが如きは是れ也。二字の音義，絶えて相ひ混ざるを容れず。而して唐人今に至るまで譌り亂すこと至って言ふべからず。古への經傳に於いても亦た意に任せて填寫し，多く讀み難きを致す。即ち『論語』一經の如きは，「云爾（しかいう）」<sup>4)</sup>と言ふ者は「如此（此くの如し）」を謂ふ也。「謹

1) 十四篇下（30b）巳部「巳，巳也」段注は『史記』律書、『漢書』律曆志、『淮南子』天文訓、『釋名』を引き、「辰巳之巳既久用爲已然，巳止之巳，故即以已然之巳釋之」，また、『毛詩』小雅・斯干「似續妣祖」箋「似讀如巳午之巳」を引き，「巳續妣祖者，謂巳成其宮廟也，此可見漢人巳午與已然無二音，其義則異而同也」という。「巳」の音は「祥里切，一部」。

2) 二篇上（41b）此部「此」段注に「雌氏切，十五部，漢人入十六部」。「古十七部諧聲表」でも「爾聲」「此聲」は十五部に見える。

3) 任誕篇第10話。阮咸の逸話。

4) 述而「其爲人也，發憤忘食，樂以忘憂，不知老之將至云爾」。

爾<sup>5)</sup>、「率爾<sup>6)</sup>」、「鏗爾<sup>7)</sup>」と言ふ者は「爾」は猶ほ「然<sup>ゼン</sup>」のごとき也。「無隱乎爾<sup>なんじ</sup>（爾に隠すこと無し）」<sup>8)</sup>、「一日長乎爾<sup>いちじつなんじ</sup>（一日爾より長ず）」<sup>9)</sup>と言ふは、「爾」猶ほ「汝<sup>ジョ</sup>」のごとき也。「汝得人焉爾乎<sup>なんじ</sup>（汝人をここに人を得たるか）」<sup>10)</sup>と言ふは、人を此に得たるや否やを言ふ。『公羊傳』<sup>11)</sup>「三年間<sup>エンシ</sup>」<sup>12)</sup>「焉爾<sup>ヨシ</sup>」、皆「於此<sup>ヨシ</sup>（此に於いて）」と訓ずる也。全經惟だ「前言之に戯れし耳<sup>のみ</sup>」<sup>13)</sup>乃ち「而已」の訓有り。今俗に刻して「汝得人焉耳乎」に作るは、乃ち極めて笑ふ可しと爲す。曹操曰く「俗語に女を生む耳と云ふ、耳は是れ足らざるの詞」と<sup>14)</sup>。此れ古説の存する者也。音轉じて讀みて「仍<sup>ジョウ</sup>」と爲す。「耳孫<sup>ジ</sup>」亦た「仍孫<sup>ジョウ</sup>」と曰ふが如きは是れ也<sup>15)</sup>。

(二) 而止の切、一部。

- 
- 5) 郷黨「其在宗廟朝廷，便便言，唯謹爾」。
- 6) 先進「子路率爾而對曰，……」。
- 7) 先進「鼓瑟希，鏗爾，舍瑟而作」。
- 8) 述而「二三子以我爲隱乎，吾無隱乎爾」。
- 9) 先進「以吾一日長乎爾，毋吾以也」。
- 10) 雍也。阮元本は「爾」を「耳」に作る。阮元校勘記に「得人焉耳乎，皇本、高麗本，乎下有哉字，案焉耳乎三字連文已屬不詞，下又增哉字更不成文，疑耳當爾字之訛，攷太平御覽一百七十四、二百六十六俱引作爾，又張栻論語解、呂祖謙論語說、真德秀論語集編暨論語纂疏、四書通、四書纂箋諸本竝作爾，又今坊本亦作爾，蓋焉爾者猶於此也，言女得人於此乎哉，此者此武城也，如書作耳，則義不可通矣。また、阮元本、集注本など諸本は「汝」を「女」に作る。
- 11) 隱公二年「曷爲始乎此，託始焉爾，曷爲託始焉爾」，注「焉爾猶於是也」。同前「始不親迎，昉於此乎，前此矣，前此，則曷爲始乎此，託始焉爾，曷爲託始焉爾，春秋之始也」注「焉爾猶於是也」。同前「紀子伯者何，無聞焉爾」。その他、『公羊傳』に見える「焉爾」は以下の通りだが、注が附されているのは上の二箇所のみ。桓公七年「曷爲國之，君存焉爾」。桓公十四年「夏五者何，無聞焉爾」。莊公二年「曷爲國之，君存焉爾」。同前「此何以卒，錄焉爾，曷爲錄焉爾，我主之也」。僖公二年「曷爲國之，君存焉爾」。文公十四年「宋子哀者何，無聞焉爾」文公十五年「此何以書，動我也，動我者何，內辭也，其實我動焉爾」。宣公八年「其言萬入去籥何，去其有聲者，廢其無聲者，存其心焉爾，存其心焉爾者何，知其不可而爲之也」宣公十六年「何言乎成周宣謝災，樂器藏焉爾」。成公二年「其稱人何，得一貶焉爾」。昭公十三年「其稱公子何，其意不當也，其意不當，則曷爲加弑焉爾」。昭公十九年「曷爲不戍于弑，止進樂而樂殺也，止進樂而樂殺，則曷爲加弑焉爾，……，止進樂而樂殺，是以君子加弑焉爾」。昭公二十九年「曷爲郟之，君存焉爾」定公元年「定哀多微辭，主人習其讀而問其傳，則未知己之有罪焉爾」。
- 12) 「然則何以三年也，曰，加隆焉爾也，焉使倍之，故再期也」注「下焉猶然」。「焉使倍之」の「焉」についての注はあるが、「焉爾」についての注はない。釋文に「加隆焉爾，一本作加隆爲爾，焉，徐如字，一音於虔反，焉猶然也，一云發聲也，注及下同」。
- 13) 陽貨。「耳」について古注・新注いずれも注無し。
- 14) 『三國志』魏書・崔琰傳に「太祖怒曰，諺言生女耳，耳非佳語，……」。
- 15) 『漢書』惠帝紀「上造以上及内外公孫耳孫有罪當刑及當爲城旦舂者」注に「應劭曰，……，耳孫者，玄孫之子也，言去其會高益遠，但耳聞之也。李斐曰，耳孫，曾孫也。……，晉灼曰，耳孫，玄孫之曾孫也，諸侯王表在八世。師古曰，……，耳孫，諸說不同，據平紀及諸侯王表說，梁孝王玄孫之子耳孫，耳音仍，又匈奴傳說握衍胸鞞單于，云烏維單于耳孫，以此參之，李云曾孫是也。然漢書諸處又皆云曾孫非一，不應雜兩稱而言。據爾雅，曾孫之子爲玄孫，玄孫之子爲來孫，來孫之子爲昆孫，昆孫之子爲仍孫，從己而數，是爲八葉，則與晉說相同。仍、耳聲相近，蓋一號也。但班氏唯存古名，而計其葉數則錯也」。

聃，耳聃也<sup>(一)</sup>，从耳，冂下聃，象形<sup>(二)</sup>，春秋傳曰<sup>(三)</sup>，秦公子聃者，其耳聃也，故目爲名<sup>(四)</sup>，聃，耳聃る也，耳に从ふ，冂，下に聃る，象形，春秋の傳に曰く，秦の公子聃なる者，其の耳聃る也，故に目て名と爲すと，

(校)「聃」，二徐「垂（墜）」に作る。「冂」，各本無し。「聃」，大徐「輒」に作り，小徐「聃聃」に作る。「其耳聃」，「聃」を大徐「下垂」に作り，小徐「墜」に作る。

(一)「聃」各本「墜」に作る。今正す。<sup>16)</sup>

(二)「冂」，今補ふ。陟葉の切，八部。

(三)按ずるに「曰」字衍なり。

(四)今『左氏傳』を按ずるに秦に公子聃無し。惟だ鄭の七穆<sup>17)</sup>，子良の子<sup>18)</sup>，公孫輒<sup>あざな</sup>，字子耳<sup>19)</sup>。許を以て之を訂すれば，古本『左傳』當に「公孫聃」に作るべし。『白虎通』に所謂る「其の名に旁<sup>ま</sup>ひて之が字と爲す。名を聞けば即ち其の字を知り，字を聞けば即ち其の名を知る也」<sup>20)</sup>。『左傳』に云ふ「類を以て命づくるを象と爲す」<sup>21)</sup>と。生まれながらにして耳垂る。因りて之を聃と名づく。猶ほ生れて夢に神黑を以て其の臀を規し，因りて之を黑臀と名づくるがごとし<sup>22)</sup>。「吳都の賦」<sup>ガウギツ</sup>「魚鳥聃聃たり」，「聃」，音「牛乙の切」<sup>23)</sup>，此の字に非ず。

16) 六篇下(5a) 聃部「聃，艸木華葉聃」段注に「引伸爲凡下聃之偶，今字墜行而聃廢矣」，十三篇下(39a) 土部「垂，遠邊也」。

17) 『左傳』襄公二十六年「叔向曰，鄭七穆，罕氏其後亡者也，子展儉而壹」注「子展鄭子罕之子，居身儉而用心壹，鄭穆公十一子，子然二子孔三族已亡，子羽不為卿，故唯言七穆」釋文「鄭七穆謂子展公孫舍之，罕氏也，子西公孫夏，駟氏也，子產公孫僑，國氏也，伯有良霄，良氏也，子大叔游吉，游氏也，子石公孫段，豐氏也，伯石印段，印氏也，穆公十一子謂子良公子去疾也，子罕公子喜也，子駟公子駢也，國公子發也，子孔公子嘉也，子游公子偃也，子豐也，子印也，子羽也，子然也，士子孔也，子然二子孔已亡，子羽不為卿，故止七也」。また、『新唐書』卷119 武平一傳に，崔日用に「鄭七穆，奈何」と問われた武平一が「鄭穆公十一子，子然及士子孔三族亡，子羽不為卿，故稱七穆，子罕、子駟、子良、子國、子游、子印、子豐也」と答えたことが見える。

18) 『左傳』昭公七年傳「況良霄我先君穆公之冑，子良之孫，子耳之子，……」。

19) 襄公九年「十一月己亥，同盟于戲，鄭服也，將盟鄭六卿，公子駢、公子發、公子嘉、公孫輒、公孫蠆、公孫舍之及其大夫門子皆從鄭伯」，「公孫輒」注に「子耳」。

20) 姓名篇「或旁其名爲之字者，聞其名即知其字，聞字即知其名也，若名賜字子貢，名鯉字伯魚」。

21) 桓公六年傳「九月丁卯，……，公問名於申繻，對曰，名有五，有信，有義，有象，有假，有類，以名生爲信，以德名爲義，以類命爲象，取於物爲假，取於父爲類，……」。

22) 繫傳に「以晉景公黑臀之類言之也」。『國語』周語下「襄公有疾，召頃公而告之曰，……，且吾聞成公之生也，其母夢神規其臀以墨，曰，使有晉國，三而昇驪之孫，故名之曰黑臀，於今再矣」韋昭注「規，畫也，臀，尻也」。今本『國語』は「黑」を「墨」に作る。『左傳』宣公二年「宣子使趙穿逆公子黑臀于周而立之」注「黑臀，晉文公子」，疏は段注と同じく「周語」を引いて「墨」を「黑」に作る。また，桓公六年傳「不以官，不以山川，不以隱疾」注「隱痛疾患，辟不祥也」疏、『禮記』曲禮上「名子者，不以國，不以日月，不以隱疾，不以山川」注「謂若黑臀黑肱矣」疏、『太平御覽』卷372 人事部十三「臀」、卷728 方術部九「筮下」引く『國語』も「黑」に作る。

23) 『文選』卷5。李善注「善曰，聃聃，衆聲也，埤蒼云，聃，不聽也，魚幽切，聃，牛乙切」。

聒，小聒耳也，从耳占聲<sup>(一)</sup>，

聒，小しく聒るる耳也，耳に从ふ，占の聲，

(校)「聒」，二徐「垂(墮)」に作る。

(一) 丁兼の切，七部。

聒，耳大聒也<sup>(一)</sup>，从耳尢聲<sup>(二)</sup>，詩曰，士之耽兮<sup>(三)</sup>，

聒，耳大いに聒るる也，耳に从ふ，尢の聲，詩に曰く，士の耽<sup>たの</sup>しむやと，

(校)「聒」，二徐「垂(墮)」に作る。

(一)『淮南』墜形訓に「夸父耽耳，其の北に在り」，高注して「耽耳は，耳垂れて肩上に在り，耽，衣褶の褶に讀み，或ひは攝に作る，兩手を以て其の肩の耳に攝する也」<sup>24)</sup>と。按ずるに許書本と「瞻」字無し。「耽」は即ち「瞻」也。今本「耽」篆の外に一「瞻」篆を沾すは誤れり矣<sup>25)</sup>。

(二) 丁含の切，八部。

(三) 衛風「氓」の文。此れ『詩』を引きて段借を説く也。毛傳に曰く「耽は樂也」と。「耽」本と「樂」と訓ぜず、而れども段りて「媿」字と爲す可し。女部に曰く「媿」なる者は「樂也」<sup>26)</sup>と。

聒，耳曼也<sup>(一)</sup>，从耳母聲<sup>(二)</sup>，聒，聒或从甘<sup>(三)</sup>，

聒，耳曼<sup>なが</sup>き也，耳に从ふ，母の聲，聒，聒，或ひは甘に从ふ，

(一)「曼」なる者は「引く也」<sup>27)</sup>。「耳曼」なる者は耳之<sup>これ</sup>を引くが如くして大也。「曼膚」、「曼鞞」の「曼」の如し。『史記』老子列傳に曰く「姓李氏，名耳，字聒」<sup>28)</sup>、『史記索隱』、『老子音義』<sup>29)</sup>、

24) 中華書局本『集解』、『集釋』いずれも、「衣褶」を「褶衣」に作り、「攝其肩之耳也」を「攝耳，居海中」に作る。『讀書雜誌』卷九之四「耽耳」引く所同じ。『讀書雜誌』校語に「褶衣」について「舊本以上脱褶字，今補，喪大記云，君褶衣褶衾，「居海中」について「舊本海譌作之，今據海外北經改」という。王念孫は「褶、攝二字，聲與耽不相近，耽字無緣讀如褶，亦無緣通作攝，耽皆當爲聒，今作耽者，後人以意改之耳，說文聒，……，玉篇豬涉切，是耳下垂謂之聒，故高注云，聒耳，耳垂在肩上，廣韻，聒耳，國名，正謂此也，字或作聒，海外北經云，聒耳之國，在無腸國東，爲人兩手聒其耳，縣居海水中，即高注所云，以兩手聒耳，居海中者也，聒與聒聲相近，故海外北經作聒，聒與聒攝聲亦相近，故高讀聒如褶，而字或作聒，後人多見聒，少見聒，亦以說文云，聒，耳大垂也，故改聒爲聒，而不知其與高注大相抵牾也」という。

25) 十二篇上(16a) 耳部「瞻」。p.159 参照。

26) 十二篇下(18a)。段注「衛風，無與士耽，傳曰，耽，樂也，小雅，和樂且湛，傳曰，湛，樂之久也，耽湛皆段借字，媿其眞字也，段借行而眞字廢矣」「丁含切，古音在七部」。『六書音均表』「今韻古分十七部表」では，覃韻、談韻は八部，「古十七部諧聲表」では，甚聲は七部，尢聲、詹聲は八部。

27) 三篇下(18a) 又部。

28) 『索隱』「按許慎云，聒，耳曼也，故名耳，字聒，有本字伯陽，非正也，然老子號伯陽父，此傳不稱也」。『正義』「聒，耳漫無輪也，神仙傳云，外字曰聒，按，字，號也，疑老子耳漫無輪，故世號曰聒」。

29) 『經典釋文』序録・注解傳述人「老子者，姓李名耳，字伯陽」注記に「史記云，字聒，又云曲里人」。

『後漢書』桓帝紀注<sup>30)</sup>、『文選』「天台山に遊ぶ賦」注<sup>31)</sup>引く所皆な此くの如し。今本『史記』「名耳、字伯陽、諡して聃と曰ふ」<sup>32)</sup>に作るは、淺人妄りに改むる者也。「字伯陽」は、唐固<sup>33)</sup>『國語』注に見ゆ<sup>34)</sup>。

(二) 他甘の切、七部。

(三) 甘の聲。

聃，聃耳也，从耳詹聲<sup>(一)</sup>，南方有聃耳國<sup>(二)</sup>，

聃，聃るる耳也，耳に从ふ，詹の聲，南方に聃耳の國有り，

(校)「聃」，二徐「垂（墜）」に作る。大徐，「聃耳」上に「有」字無く，下に「之」字有り，

(一) 都甘の切，八部。

(二) 古へは祇だ「耽」に作り，一變して「聃耳」に爲り，再變して則ち「儋<sup>35)</sup>耳」に爲る矣<sup>36)</sup>。

聃，耳箸頰也<sup>(一)</sup>，从耳婁省聲<sup>(二)</sup>，杜林說，耿，光也<sup>(三)</sup>，从火<sup>(四)</sup>，聖省聲。凡字皆ナ形又聲，杜說非也<sup>(五)</sup>，

耿，耳頰に箸く也，耳に从ふ，婁の省聲，杜林の說に，耿は光也と，火に从ふ，聖の省聲，凡そ字は皆ナ形又聲，杜說非也，

(校)「婁」，小徐「炯」に作る。「火」，二徐「光」に作る。「ナ」，二徐「左」に作る。「又」，二徐「右」に作る。「杜說非也」，大徐「說」を「林」に作り，小徐「杜」を「耿光」に作り，「也」を「是」に作る。

30) 「八年春正月，遣中常侍左<sup>レ</sup>愾之苦縣，祠老子」注に「史記曰，老子者，楚苦縣厲<sup>レ</sup>鄉曲仁里人也，名耳，字聃，姓李氏」。

31) 卷11。「躡二老之玄蹤」注に「二老，老子、老萊子也，史記曰，老子者，楚苦縣人，名耳，字聃，姓李氏矣」。

32) 百衲本、四庫全書本『史記正義』同じ。中華書局本は「字聃」。

33) 『三國志』吳書・闕澤傳に「澤州里先輩丹楊唐固亦修身積學，稱為儒者，著國語、公羊、穀梁傳注，講授常數十人」。唐固『國語注』は、『隋書』經籍志・經・春秋に「春秋外國語二十一卷唐固注」と見えるほか、『舊唐書』經籍志、『新唐書』藝文志、『通志』藝文略にやはり「二十一卷」として著録されている。玉函山房輯佚書、漢學堂叢書に、輯本がある。それらによると、『史記索隱』は下注に引く箇所のみだが、『史記集解』はしばしば唐固注を引く。

34) 『史記』周本紀「周太史儋」、『索隱』に「老子列傳曰，儋即老子耳，又曰非也，驗其年代是別人」。『正義』「幽王時有伯陽甫，唐固曰，伯陽甫，老子也，按幽王元年至孔子卒三百餘年，孔子卒後一百二十九年，儋見秦獻公，然老子當孔子時，唐固說非也」。

35) 八篇上(13b)人部「儋，何也」。「何」は今の「荷」，になうの意。「从人詹聲」段注に「都甘切，八部」。

36) 『集韻』下平二十三談・儋(都甘切)小韻「聃，說文垂耳也，南方有聃耳國，通作儋」。『呂氏春秋』審分覽・任數篇、恃君覽・恃君篇、『山海經』大荒北經には北方の國「儋耳」が見える。漢元鼎六年，今の海南島儋縣に「儋耳郡」が置かれ(『漢書』武帝紀)，『史記』貨殖列傳、『漢書』、『後漢書』明帝紀、章帝紀、東夷伝、南蠻西南夷傳等はいずれも「儋耳」に作る。

(一)「頰」なる者は「面の旁也」<sup>37)</sup>。耳頰に箸くを「耿」と曰ふ。「耿」の言は「黏」<sup>38)</sup>也。頰に黏く也。邾風<sup>39)</sup>「カフカフ」耿耿として寐ねず、傳に曰く「耿耿は猶ほ徹徹のごとき也」と。之を憂ひて心に聯綴す。義を此に取る。凡そ「耿」と云ふ者は專壺を謂ふ也。杜林の説「耿は光」を皮傳し<sup>40)</sup>而して字義に非ず。

(二)「桂」<sup>41)</sup>小徐「炯」<sup>42)</sup>に作る。大徐本舊と皆な「桂」に作る。「桂」は讀みて「𠂔」<sup>43)</sup>の若くす。火部に見ゆ。「耿」<sup>カウ</sup>、古杏の切、十一部。

(三)『古文尙書』に曰く「文王之耿光」<sup>44)</sup>、「離騷」注に曰く「耿は光也」<sup>45)</sup>、又た曰く「耿は明也」<sup>46)</sup>と。

(四)『韻會』<sup>47)</sup>に依りて訂す。

(五)徐鍇曰く「此の説或ひは後人の加ふる所」<sup>48)</sup>と。

𦘒、連也<sup>(一)</sup>、从耳从絲<sup>(二)</sup>、从耳、耳連於頰<sup>(三)</sup>、从絲、絲連不絶也<sup>(四)</sup>、

𦘒は連なる也、耳に从ひ、絲に从ふ、耳に从ふは、耳頰に連なり、絲に从ふは、絲連なりて絶えざれば也、

(校)二徐、「从耳从絲」四字無し。

(一)「連」なる者は「負車也」<sup>49)</sup>。「負車」なる者は人を以て車を輓き、人と車と相ひ屬なる。

37) 九篇上(3b)頁部。

38) 七篇上(57a)黍部に「黏、相箸也、从黍占聲」段注に「女廉切、七部」。

39) 柏舟。釋文「耿耿、古幸反、徹徹也」「徹徹、音景」。

40) 『後漢書』張衡傳に「且河洛、六藝、篇錄已定、後人皮傳、無所容纂」。淺薄な見方で牽強附會すること。

41) 十篇上(44b)火部「桂、行竈也、从火圭聲、讀若同」段注に「古支清合韻」「口迴切、十六部」。『六書音均表』『今韻古分十七部表』では、支は十六部、清は十一部、「古十七部諧聲表」では、圭聲は十六部、𠂔(回)聲は十一部。

42) 十篇上(51a)火部「炯、光也、从火回聲」段注に「古迴切、十一部」。

43) 五篇下(26a)𠂔部「𠂔、邑外謂之郊、郊外謂之野、野外謂之林、林外謂之𠂔、象遠介也」段注「介各本作界、誤、今正、……、古榮切、十一部」。

44) 立政。しかし、『古文尙書撰異』卷25「至于𠂔表罔有不服以觀文王之耿光以揚武王之大力」では「石經尙書殘碑王之鮮光臥揚武王……、按耿作鮮、此今文尙書也、東觀餘論引文王之鮮光、尙書大傳周傳雜詁篇曰、以勤文王之鮮光、以揚武王之大訓、觀作勤、耿作鮮、此今文尙書之一證也」という。

45) 「彼堯舜之耿介兮」注。補注に「耿、古迴、古幸二切」。

46) 「耿吾既得此中正」注。

47) 『古今韻會舉要』上二十三梗・耿(古幸切)小韻。

48) 『繫傳』「今按鳥部多右形左聲、不知此言後人加之邪、將傳寫失之邪」。

49) 二篇下(9a)辵部。段注に「負車、各本作負連、今正、連即古文輦也、……、負車者、人輓車而行、車在後如負也、字从辵車會意、猶輦从𦘒車會意也、人與車相屬不絕、故引伸爲連屬字、耳部曰、聯、連也、大宰注曰、古書連作聯、然則聯連爲古今字、連輦爲古今字、假連爲聯、乃專用輦爲連、大鄭當云連今之輦字、而云讀爲輦者、以今字易古字、令學者易曉也、許不於車部曰連古文輦而入之辵部者、小篆連與輦殊用、故云聯連也者、今義也、云連負車也者、古義也」。

因りて以て凡そ相ひ連屬するの僞と爲す。周人「聒」字を用ひ、漢人「連」字を用ふ。古今字也。『周禮』「官聒以て官治を會す」、鄭注して「聒は讀みて連と爲す」<sup>50)</sup>と。古書「連」を「聒」に作る。此れ今字を以て古字を釋すの例。

(二) 四字今補ふ。會意。力延の切、十四部。

(三) 故に耳に从ふ。

(四) 故に又た絲に从ふ。

聒、耳鳴也<sup>(一)</sup>、从耳聒聲<sup>(二)</sup>、

聒、耳鳴る也、耳に从ふ、聒の聲、

(校)「聒」、二徐「卯(𠂔)」に作る。

(一)『楚辭』に曰く「耳聒啾として儻慌たり」、王注して云ふ「聒啾は耳鳴る也」<sup>51)</sup>と。此れ「聒」の本義、故に字耳に从ふ。『詩』「泉水」傳「聒は願ふ也」と云ひ、箋「聒は且略の辭」也と云ひ<sup>52)</sup>、『方言』「俚は聒也」と曰ひ<sup>53)</sup>、『戰國策』「民聒む所無し」<sup>54)</sup>の若きは、此等義相ひ近し。皆「聒」を段りて「聒」<sup>55)</sup>と爲す也。「聒」なる者は聒頼する也。又た『詩』の傳に「椒聒は椒也」<sup>56)</sup>、「聒」語詞爲るを言はず。蓋し單評すれば「椒」と曰ひ、彙評すれば「椒聒」と曰ふ。『楚辭』亦た「椒聒の設設たるを懷く」<sup>57)</sup>と云ふ。『爾雅』に曰く「科なる者は聒」<sup>58)</sup>と。「科」<sup>59)</sup>は即ち「菜」<sup>60)</sup>。椒櫪の實は菜彙を成す<sup>61)</sup>。

50) 天官・大宰「以八瀆治官府、……、三曰官聒、以會官治、……」注「鄭司農云、……、聒謂國有大事、一官不能獨共、則六官共舉之、聒讀為連、古書連作聒、聒謂連事通職相佐助也、……」。

51) 九歎・遠逝。章句「聊啾、耳鳴也、儻慌、憂愁也」。

52) 邶風。「變彼諸姬、聊與之謀」傳箋。

53) 卷3。郭注「謂苟且也」。

54) 秦策一「蘇秦始將連橫」篇。姚宏本注「民無所聊頼者也」、鮑彪注「集韻、聊、頼也」。

55) 十篇下(31b)心部「聒、聒然也」段注に「類篇曰、力求切、頼也、且也、按聒者、聒之段借字、方言、俚、聒也、漢書、其畫無俚之至耳、戰國策、民無所聒、凡聒頼可作聒頼」「洛蕭切、古音在三部、力求切」。

56) 唐風・椒聊。

57) 九歎・愍命。章句「在袖曰懷、椒聊、香草也」。補注本は「袖」を「衣」に作る。

58) 釋木。釋文「科、郭音糾、又居幽反、又音皎」阮元校勘記に「科者聊、唐石經、雪認本同、注疏本科、誤、科、釋文云、郭音糾、而字亦誤科、此科與聊為韻」。

59) 六篇上(25a)木部「科、高木下曲也、從木斗、斗亦聲」段注に「吉虬切、三部」。

60) 一篇下(32b)艸部「菜、櫪菜實、裏如裘也、从艸求聲」段注に「巨鳩切、三部求即裘之古文、亦會意也」。

61) 『爾雅』釋木「椒櫪醜菜」注「菜、莢子聚生成房貌」疏「菜者實之房也、椒櫪之類實皆有菜彙自裹」



(二) 「𠄎」<sup>イウ</sup>62) 各本譌りて「𠄎」<sup>バウ</sup>63)に作る。篆體亦た譌れり。今竝びに正す<sup>64)</sup>。洛蕭の切、古音三部に在り。讀みて「𠄎」<sup>リウ</sup>の如くす。

𠄎、通也<sup>(一)</sup>、从耳<sup>(二)</sup>呈聲<sup>(三)</sup>、

聖は通ずる也、耳に从ふ、呈の聲、

(一) 邶風「母氏聖く善なり」傳に云く「聖は叡也」<sup>65)</sup>、小雅「或ひは聖或ひは不」傳に云く「人通じて聖き者有り、能はざる者有り」<sup>66)</sup>と。『周禮』「六徳もて萬民に教ふ、智、仁、聖、義、忠、和」注に云ふ「聖は通じて先に識る」<sup>67)</sup>と。「洪範」に曰く「睿は聖を作す」と<sup>68)</sup>。凡そ一事精通すれば、亦た之を聖と謂ふを得。

(二) 「聖」「耳に从ふ」者は其の耳に順ふを謂ふ。『風俗通』に曰く「聖なる者は聲也、言ふところは、聲を聞きて情を知るなり」<sup>69)</sup>と。按ずるに「聲」「聖」字古へ相ひ段借す。

(三) 式正の切、十一部。

𠄎、察也<sup>(一)</sup>、从耳兪聲<sup>(二)</sup>、

聰、察也、耳に从ふ、兪の聲、

(一) 「察」なる者は覈也<sup>70)</sup>。「聰」「察」雙聲を以て訓を爲す。

(二) 倉紅の切、九部。

62) 「酉」の古文。十四篇下(33a)西部「酉、就也、八月黍成、可爲酎酒、象古文酉之形也、……、𠄎、古文酉、从𠄎、𠄎爲春、萬物已出、𠄎爲秋門、萬物已入、一、闕門象也」。段注「與久切、三部」。

63) 「𠄎」は「𠄎」の篆體。十四篇下(29b)卯部「卯、冒也、二月萬物冒地而出、象開門之形、故二月爲天門」。段注「莫飽切、古音在三部」。

64) 段玉裁はしばしば「𠄎」「𠄎」を辨別するべきことを説く。例えば、一篇上(37a)玉部「珣、石之有光者、璧珣也、出西胡中、从玉珣聲」段注に「廣韻引說文音畱、三部、玉裁按、古音卯𠄎二聲同在三部爲疊韻、而畱珣珣珣𠄎劉等字皆與𠄎又疊韻中雙聲、昂賀茆等字與卯疊韻中雙聲、部分以疊韻爲重、字音以雙聲爲重、許君𠄎𠄎畫分、而從𠄎之字俗多改爲從卯、自漢已然、……、凡俗字𠄎變卯者、今皆更定、學者勿持漢人繆字以疑之」(「𠄎𠄎畫分」皇清經解本に據る。「𠄎𠄎」、經韻樓本「𠄎𠄎」に作る。同治十一年湖北崇文書局重刊本「𠄎𠄎」に作る)。そのほか、一篇下(51b)艸部「𠄎」字、六篇上(14b)木部「𠄎」字段注、『古文尚書撰異』卷一上堯典「分命和仲宅西曰昧谷」にも同様の説が見える。

65) 凱風。箋「叡作聖」。

66) 小旻。阮元本は「不」を「否」に作る。

67) 地官・大司徒「以郷三物教萬民、而賓興之、一曰六徳、知、仁、聖、義、忠、和」。

68) 「二五事、…、五曰思、…、思曰睿、…、睿作聖」僞孔傳「於事無不通謂之聖」。

69) 『藝文類聚』卷20人部四・聖「風俗通曰、聖者聲也、通也、言其聞聲知情、通於天地、條暢萬物也」、『太平御覽』卷401人事部四十二・叙聖引く『風俗通』は、「條」を「調」に作り、「物」下「也」字無し。

70) 七篇下(9b)宀部「察、覆審也」段注に「西部云、西、覆也、覈、從西斂聲、實也、攷事西斂邀遮其辭得實曰覈、然則察與覈同意」。「西」「覈」は七篇下(44a)西部。

聦，聆也<sup>(一)</sup>，从耳惠<sup>(二)</sup>，壬聲<sup>(三)</sup>，

聽，聆く也，耳惠に从ふ，壬の聲，

（校）「从耳惠壬聲」，小徐「從惠從耳從壬聲」に作る。

（一）凡そ目の及ぶ所の者を「視」と云ふ。「朝を視る」、「事を視る」の如きは是れ也。凡そ目<sup>あまね</sup>徧くする能わずして耳及ぶ所の者を「聽」と云ふ。「天下を聴く」、「事を聴く」の如きは是れ也。

（二）會意。「耳惠」なる者は耳得る所有者也。

（三）他定の切，十一部。

聆，聽也<sup>(一)</sup>，从耳令聲<sup>(二)</sup>，

聆，聽く也，耳に从ふ，令の聲，

（一）二篆轉注なり。『匡謬正俗』俗語を載せて「瓦を聆く」<sup>71)</sup>と云ふ。「聆く」なる者は之を聽きて微を知る者也。「文王世子」に曰く「夢に帝 我に九聆を與ふ」<sup>72)</sup>と。此れ「聆」を段りて「鈴」と爲す。夢に天 九個の鈴を以て己に與ふる也。

（二）郎丁の切，古音十二部に在り。

聦，記敷也<sup>(一)</sup>，从耳戠聲<sup>(二)</sup>，

職，敷を記す也，耳に从ふ，戠の聲。

（校）「敷」，二徐「微」に作る。

（一）「敷」舊と「微」に作る。今正す<sup>73)</sup>。「記」は猶ほ「識」のごとき也<sup>74)</sup>，織微必ず識すを是れ「職」と曰ふ。<sup>75)</sup>『周禮』太宰の職、大司徒の職皆な其の司どる所を謂ふ。凡そ「司」と言ふ者は其の善く伺ふを謂ふ也。凡そ「職」と言ふ者は其の善く聴くを謂ふ也。「釋詁」に曰く「職は主也」<sup>76)</sup>。

71) 卷6聆「問曰、今俗買瓦器、以枚敲之、知其全破善惡、謂之為聆、此義何也、答曰、按説文解字云、聆、聽也、……、瓦破壊者聲嘶惡、須一一擊而聽之、故呼聆瓦」。

72) 阮元本「聆」を「齡」に作る。疏に「皇氏云、以九齡謂鈴鐸、謂天以九箇鈴鐸而與武王、徧驗書本、齡皆從齒、解為鈴鐸、於理有疑、亦得為一義」釋文「九聆、音零、本或作齡」。阮元校勘記に「閩監毛本同、石經同、岳本同、嘉靖本同、衛氏集説同、釋文出九聆云、……、正義以皇氏解九齡為鈴鐸、而云……」。

73) 二篇下(15a)彳部「微、隱行也」段注に「敷訓眇、微从彳、訓隱行、段借通用微而敷不行」。八篇下(19a)人部「眇也」段注「眇各本作眇、今正、凡古言敷眇者、即今之微眇字、眇者小也、引伸為凡細之稱、微者隱行也、微行而敷廢矣」。

74) 三篇上(18a)言部「記、疋也」段注「疋各本作疏、今正、疋部曰、一曰疋、記也、此疋記二字轉注也、疋今字作疏、謂分疏而識之也、廣雅曰、註、紀、疏、記、學、葉、志、識也」。

75) 『繫傳』に「周禮、國有六職、皆主記事之微也」。

76) 「尸、職、主也」。

毛傳同じ。『詩』「悉蟀」<sup>77)</sup>「十月之交」<sup>78)</sup>に見ゆ。『周禮』「職方」, 亦た「識方」に作る<sup>79)</sup>。

(二) 之弋の切, 一部。

聒, 謹語也<sup>(一)</sup>, 从耳昏聲<sup>(二)</sup>,

聒, 謹語する也, 耳に从ふ, 昏の聲,

(一) 「謹」なる者は「謹しき也」<sup>80)</sup>。

(二) 古活の切, 十五部。

聒, 張耳有所聞也<sup>(一)</sup>, 从耳禹聲<sup>(二)</sup>,

聒, 耳を張りて聞く所有る也, 耳に从ふ, 禹の聲,

(一) 『廣雅』に「聒也」<sup>81)</sup>と。

(二) 王矩の切, 五部。

聒, 音也<sup>(一)</sup>, 从耳殼聲<sup>(二)</sup>, 殼, 籀文磬<sup>(三)</sup>,

聒は音也, 耳に从ふ, 殼の聲, 殼, 籀文の磬,

(校) 小徐, 「殼籀文磬」四字無し。

(一) 「音」下に曰く「聒也」と, 二篆轉注爲り, 此れ之を渾言する也。之を析言すれば則ち「心に生じ節外に有るは之を音と謂ふ, 宮、商、角、徵、羽は聲也, 絲、竹、金、石、匏、土、革、木は音也」と曰ふ<sup>82)</sup>。「樂記」に曰く「聒を知りて音を知らざる者は禽獸是れ也」<sup>83)</sup>と。

(二) 書盈の切, 十一部。

(三) 石部に見ゆ<sup>84)</sup>。

---

77) 唐風。「職思其居」傳。

78) 小雅。「職競由人」傳。

79) 『隸釋』卷二「樊毅脩華嶽碑」に「周禮識方氏華謂之西嶽」。『集古錄』卷1「後漢樊毅華嶽碑」に「惟以周禮職方氏為識方氏, 其字畫分明, 非訛缺, 疑當時周禮之學自如此, 蓋識誌其義皆通也」。『金石錄』卷17「漢華岳碑」は『集古錄』を引き「余按袁逢華嶽碑亦引職方氏乃用識字, 蓋漢人簡質字相近者輒假借用之, 初無意義爾」。また, 惠棟『九經古義』卷八・周禮古義「職方氏」も「樊毅脩華嶽碑」と『集古錄』を引き「棟案周禮多古字, 如機字作職, 職字作識, 識字作志, 漢時已不能盡攷, 况後世乎」。

80) 三篇上 (26b) 言部。

81) 釋詁下。『大廣益會玉篇』卷4 耳部第五十五「聒」項に「蒼頡篇, 聒, 聒也」。

82) 三篇上 (32b) 音部「音, 聲生於心, 有節於外謂之音, 宮商角徵羽, 聲也, 絲竹金石匏土草木, 音也」。

83) 注「禽獸知此為聒耳, 不知其宮商之變也」。

84) 九篇下 (29b) 石部「石樂也, 从石, 声象縣虞之形, 爰所呂擊之也, 古者母句氏作磬, 殼, 籀文, 省, 磬, 古文, 从至」。段注「石樂, 各本作樂石, 誤, 今正」「非籀省篆, 乃篆加籀也」。

聞，知聲也<sup>(一)</sup>，从耳門聲<sup>(二)</sup>，𦉳，古文从昏<sup>(三)</sup>，

聞，聲を知る也，耳に从ふ，門の聲，𦉳，古文昏<sup>フン</sup>に从ふ，

(校) 大徐，「知聲」を「知聞」に作る。<sup>85)</sup> 小徐，「古文」下に「聞」字有り。

(一) 往くを聴と曰ひ，来るを聞と曰ふ。「大學」に曰く，「心ここにあらざれば，聴けども聞こえず」と<sup>86)</sup>。之を引申して「令聞廣譽」と爲す。

(二) 無分の切，十三<sup>87)</sup>部。

(三) 昏の聲<sup>88)</sup>。

聘，訪也<sup>(一)</sup>，从耳聘聲<sup>(二)</sup>，

聘，訪ふ也，耳に从ふ，聘の聲，

(一) 「汎く謀るを訪と曰ふ」<sup>89)</sup>。按ずるに女部に曰く「娉は問也」<sup>90)</sup>と。二字義略ほ同じ。

(二) 匹正の切，十一部。

聾，無聞也，从耳龍聲<sup>(一)</sup>，

聾，聞くこと無き也，耳に从ふ，龍の聲，

(一) 盧紅の切，九部。

聾，生而聾曰聾<sup>(一)</sup>，从耳從省聲<sup>(二)</sup>，

聾，生れながらにして聾なるを聾と曰ふ，耳に从ふ，從の省聲，

(一) 『方言』に「聾は聾也，生れながらにして聾なり，陳楚江淮の間之を聾と謂ふ。荆揚の間及び山の東西，雙聾なる者は之を聾と謂ふ」<sup>91)</sup>と。又た古へ多く「聾」を段りて「聾」と爲す。『方言』に曰く「聾は悚也」<sup>92)</sup>，又た曰く「聾は欲也。荆吳の間は聾と曰ふ。關自りして西，秦晉の

85) 『大廣益會玉篇』卷4 耳部第五十五「聞」項引く『説文』は「知聲也」に作る。

86) 原文「心不在焉，視而不見，聽而不聞，食而不知其味」。

87) 藝文印書館本、同治十一年湖北崇文書局重刊本、石印本、皇清經解本同じ。藝文印書館本と同じく經韻樓本の影印である上海古籍本は「三」の二畫目がかすれ、「二」と讀める。

88) 七篇上(7a) 日部「昏，日冥也，从日氏省，氏者下也」段注「昏字於古音在十三部，不在十二部，……，昏古音同文，與眞臻韻有斂侈之別，……，呼昆切，覓韻者文韻之音變」。九篇上(20b) 文部「文」は「無分切，十三部」。『六書音均表』『古十七部諸聲表』では，門聲、昏聲、文聲いずれも十三部。

89) 三篇上(11b) 言部。

90) 十二篇下(21b)。段注に「凡娉女及聘問之禮古皆用此字，娉者專詞也，聘者汎詞也，耳部曰，聘者訪也，言部曰，汎謀曰訪，故知聘爲汎詞也，……，而經傳槩以聘代之，聘行而娉廢矣」。

91) 卷6。

92) 卷13。

間は相ひ勸むるを聾と曰ふ。中心欲せず，而して旁人の勸語に由る，亦た之を聾と謂ふ』<sup>93)</sup>と。

(二) 息拱の切，九部。

聾，益梁之州謂聾爲聾，秦晉聽而不聽，聞而不達謂之聾<sup>(一)</sup>，从耳宰聲<sup>(二)</sup>，

聾，益梁の州，聾を謂ひて聾と爲す，秦晉，聽きて聽らず，聞きて達らず，之を聾と謂ふ，耳に从ふ，宰の聲，

(校)「聽」，大徐「聞」に作る。

(一)『方言』に曰く「聾は聾也。梁益の間，之を聾と謂ふ。<sup>94)</sup> 秦晉の間，聽きて聽らず，聞きて達らず，之を聾と謂ふ」<sup>95)</sup>と。

(二) 作亥の切，一部。

聾，聾也<sup>(一)</sup>，从耳貴聲<sup>(二)</sup>，聾，聾或从聾<sup>(三)</sup>，聾，或从篆作<sup>(四)</sup>，

聾，聾也，耳に从ふ，貴の聲，聾，聾或ひは聾に从ふ，聾，或ひは篆に从ひて作る，

(校) 小徐，「聾」上に「生」字有り。大徐，「聾」以下五字無し。

(一)『國語』に曰く「聾聾聽かしまる可からず」，韋云ふ「耳五聲の和を別たざるを聾と曰ひ，生れながらにして聾なるを聾と曰ふ」<sup>96)</sup>と。

(二) 五怪の切，十五部。

(三) 許書，聾聲の字三<sup>97)</sup>，而して「聾」篆を逸す。<sup>98)</sup>

(四)「篆」應に「辛の省」に改むべし。說豕部<sup>99)</sup>に見ゆ。

聾，無知意也<sup>(一)</sup>，从耳出聲，讀若擊<sup>(二)</sup>，

93) 卷6。四庫全書本、疏證本、箋疏本、校箋本、「亦謂之」を「亦曰」に作る。

94) 四庫全書本、疏證本、箋疏本、校箋本、「梁益之間謂之聾」上に「半聾」二字有り。

95) 卷6。

96) 晉語四・文公問於胥臣章。

97) 一篇下(18b)艸部「聾，艸也，从聾聾聲」段注に「按說文無聾字，而爾雅有之，釋詁曰，聾，息也，音義曰，聾，苦怪反，又墟季反，字林以爲喟，工懷反，孫本作快，郭又作噴，按聾字今不可得其左旁所從何等，字之本訓何屬，但其古音在十五部甚明，說文聾聾皆以爲聲，而聾字亦作聾，聾字，逸詩與萃圍爲韻，皆在十五部也，……，苦怪切」。六篇下(56b)邑部「聾，汝南安陽鄉，从邑聾省聲」段注に「聾宋版及小徐皆不從聾，艸部聾、耳部聾皆聾聲，則固有聾字矣，苦怪切，十五部，……」。

98) 大徐本「臣鉉等曰，當从聾聲，義見聾字注」，「聾」字下に「臣鉉等案，說文無聾字，當是字之省，而聾不相近，未詳」。

99) 九篇下(38a)「豕，豕怒毛豎也，一曰殘艾也，从豕辛省」段注に「各本無省字，篆體从辛豕，今按五經文字毅下云从辛省，正从辛省之譌，以毛豎如食辛辣也，會意，魚既切，十五部」。

**聃**<sup>グヅ</sup> 無知の意也，耳に从ふ，出の聲，讀みて聃<sup>グヅ</sup><sup>100</sup>の若くす，

- (一) 此れ「意は内にして言は外なり」<sup>101</sup>の意。「無知」なる者は其の意、「聃」なる者は其の聃也。『方言』に曰く「聃の甚しきは，秦晉の間之を聃と謂ふ」，注に曰く「言ふところは，聃は聞き知る所無き也」<sup>102</sup>と。疑ふらくは『方言』の正文本と「之を聃と謂ふ」に作る。今本譌れり。
- (二) 五滑の切，十五部。

**聃**，聃耳也<sup>(一)</sup>，从耳月聲<sup>(二)</sup>，

**聃**<sup>グヅ</sup><sup>103</sup>，耳を聃とす也，耳に从ふ，月の聲，

- (校) 小徐，「聃」を「墮」に作る<sup>104</sup>。
- (一) 『方言』<sup>105</sup>に見ゆ。
- (二) 魚厥の切，十五部。

**聃**，吳楚之外，凡無耳者謂之聃<sup>(一)</sup>，言若斷耳爲盟<sup>(二)</sup>，从耳閔聲<sup>(三)</sup>，

**聃**<sup>グヅ</sup>，吳楚の外，凡そ耳無き者は之を聃と謂ふ，耳を斷つを盟と爲すが若きを言ふ，耳に从ふ，閔の聲，

- (校) 小徐，「言」を「讀」に作り，「讀」以下六字「閔聲」の下に有り。
- (一) 『方言』に曰く「吳楚の外郊，凡そ耳有ること無き者は之を聃と謂ふ。其の聃と言ふ者は，秦晉中土，耳を墮とす者を聃と謂ふが若き也」<sup>105</sup>と。
- (二) 「耳を斷つ」は即ち「耳を墮とす」なり。「盟」は當に「聃」に作るべし。字の誤り也。
- (三) 五刮の切，十五部。

**聃**，軍法目矢田耳也，从耳矢<sup>(一)</sup>，司馬灋曰，小聃聃之，中聃別之，大聃到之，

**聃**，軍法，矢を目て耳を田く也，耳矢に从ふ，司馬灋に曰く，小聃は之を聃<sup>テツ</sup>し，中聃は之を別<sup>グヅ</sup><sup>106</sup>し，

100) 十四篇下(25b) 子部「聃，庶子也，从子聃聲」段注「魚列切，十五部」。

101) 九篇上(29b) 司部「聃，意内而言外也」段注に「有是意於内，因有是言於外謂之聃，此語爲全書之凡例，全書有言意者，如……之類是也，有言聃者，如……之類是也，意即意内，聃即言外，言意而聃見，言聃而意見，意者文字之義也，言者文字之聲也，聃者文字形聲之合也，凡許之說字義皆意内也，……」。

102) 卷6。四庫全書本、疏證本、箋疏本、校箋本，「甚」下に「者」字有り。

103) 「聃」篆は大徐本では「聃」の後「聃」の前に置かれる。

104) 十四篇下(5b) 自部「聃，敗城自曰聃，从自差聲，聃，篆文。」段注に「許書無差字，蓋或古有此文，或彖左爲聲，皆未可知，聃爲篆文，則聃爲古籀可知也，山部聃曰聃聲，肉部聃曰聃省聲，皆用此爲聲也，小篆聃作聃，隸變作聃」。

105) 卷6「吳楚之外郊，凡無耳者亦謂之聃，其言聃者，若秦晉中土謂聃耳者聃也」。

106) 四篇下(48b) 刀部「別，絕也」段注「凡絕皆偏別，故剗下云別鼻也，別足則爲別，……，困九五，剗別，京房作剗，說文剗與別義同」。

大臯は之を剗<sup>ケイ</sup><sup>107)</sup>すと、

(校)「冎」, 二徐「貫」に作る<sup>108)</sup>。「灋」, 二徐「法」に作る<sup>109)</sup>。「臯」, 二徐「罪」に作る<sup>110)</sup>。大徐、三「之」字無し。

(一) 會意, 恥列の切, 十五部。

聑, 軍戰斷耳也<sup>(一)</sup>, 春秋傳曰, 呂爲俘聑<sup>(二)</sup>, 从耳或聲<sup>(三)</sup>, 聑, 聑或从聑<sup>(四)</sup>,

聑, 軍戰して耳を斷つ也, 春秋の傳に曰く, 呂て俘聑と爲る, 耳に从ふ, 或の聲, 聑, 聑或ひは聑に从ふ,

(一) 大雅「聑る攸安安たり」, 傳に曰く「聑は獲也, 服せざる者は殺して其の左耳を獻ずるを聑と曰ふ<sup>111)</sup>と。魯頌「泮に在りて聑を獻ず」, 箋に云く「聑は格する所の者の左耳<sup>112)</sup>と。

(二) 『左傳』成三年の文<sup>113)</sup>。

(三) 古獲の切, 古音一部に在り。

(四) 今經傳中多く首に从ふ<sup>114)</sup>。

靡, 乘輿金耳也<sup>(一)</sup>, 从耳麻聲, 讀若溷水, 一曰若月令靡艸之靡<sup>(二)</sup>,

靡, 乘輿の金耳也, 耳に从ふ, 麻の聲, 讀みて溷<sup>115)</sup>水の若くす, 一に曰く, 月令靡艸<sup>116)</sup>の靡<sup>117)</sup>の若くすと,

(校)「金耳」, 大徐「金馬耳」に作り, 小徐「金飾馬耳」に作る。

107) 四篇下 (50a) 刀部「剗, 刑也」段注「耳部曰, 小罪聑, 中罪別, 大罪剗, 剗謂斷頭也」。

108) 七篇上 (29b) 冎部「冎, 穿物持之也, ……」段注に「古貫穿用此字, 今貫行而冎廢矣」また七篇上 (29b) 冎部に「貫, 錢貝之冎 (二徐「貫」に作る) 也」。

109) 十篇上 (20a) 灋部「灋, 刑也, 平之如水, 从水, 所目觸不直者去之, 从廌去, 法, 今文省」段注に「許書無言今文者, 此蓋隸省之字, 許書本無, 或増之也」。

110) 十四篇下 (22b) 辛部「臯, 犯灋也, ……」, 秦呂臯偁臯字, 改爲罪」, また七篇下 (41a) 罔部「罪, 捕魚竹罔, ……」, 秦呂爲臯字」。

111) 皇矣。阮元本「其」字無し。

112) 泮水。疏は箋を引いて「格」を「獲」に作る。校勘記に「岡本、明監本、毛本同、案獲當作格、箋文是、格字、正義下文云、謂臨陣格殺之可證」。

113) 阮元本は「聑」を「聑」に作る。

114) 阮元本では、經傳に「聑」は見えないが、「聑」は説解引く『左傳』成公三年の傳、段注の引く『毛詩』二例のほか、『禮記』王制 (「以訊讞告」)、『左傳』僖公二十二年傳 (「楚子使師縉示之俘讞」)、僖公二十八年傳 (「獻俘授讞」)、宣公二年傳「俘二百五十人, 讞百人」、宣公十二年傳 (「折讞, 執俘而還」)、『爾雅』釋詁下 (「讞, 積, 獲也」) に見える。

115) 十一篇上二 (36a) 水部「飲敵也, 从水弭聲」段注「蘇婢切, 十六部」。『周禮』春官・小宗伯釋文に「鬯溷, 亡婢反, 杜音混, 亡忍反, 李亡辨反」大祝釋文に「溷, 彌爾反」。

116) 季春之月。

117) 十一篇下 (32a) 非部「靡, 被靡也, 从非麻聲」段注に「文彼切, 古音在十七部」。

(一)「金耳」俗本「金飾馬耳」に作る。舊本「金馬耳」に作る。『玉篇』<sup>118)</sup> 同。今『廣韻』五支、四紙「乘輿金耳」に作るに依りて訂正す<sup>119)</sup>。「乘輿」なる者は天子の車也。「金耳」なる者は金飾の車耳也。「西京の賦」に「翠帽を戴き、金較に倚る」、薛注して「金較は黄金以て較を飾る也、崔豹古今注に曰く、車耳は重較<sup>120)</sup>」<sup>121)</sup>と。『史記』禮書「彌龍」徐廣曰く乘輿の車は金薄繆龍もて輿の倚較を爲る<sup>122)</sup>と。「繆」なる者は交錯の形、車耳は交錯の龍を刻し、飾るに金を以てす。惟だ乘輿のみ然りと爲す。「文虎賦に伏し、龍首軛を銜へる」<sup>122)</sup>と畫きて三事を爲す。『史記』の「彌<sup>レ</sup>」は即ち許の「麤<sup>レ</sup>」,「麤」なる者は本字,「彌」なる者は同音段借字なり。淺人其の解を得ず、乃ち妄りに改めて而して通ず可からず矣。「麤」は人の耳に非ざる也。故に其の字<sup>しんがり</sup>殿す焉。

(二) 亡彼の切,『廣韻』亦た忙皮の切<sup>123)</sup>。古音十七部に在り。音十六部に轉入す。「彌」字古へ多く十六部に在りて用ふ。故に「彌」を段りて「麤」と爲す。

𦉰, 國語曰, 回祿信於聆遂, 闕<sup>(一)</sup>,

聆, 國語に曰く, 回祿 聆遂に信すと, 闕,

(一)『國語』今周語に見ゆ<sup>124)</sup>。「闕」なる者は其の義、其の音、其の形皆な闕くるを謂ふ也。韋注して「聆遂は地名」,宋庠「音禽<sup>キン</sup>」<sup>125)</sup>。『後漢書』楊賜傳引きて「黔遂」に作る<sup>126)</sup>。「黔」亦た<sup>キン</sup>今聲也。而して『說苑』,『國語』を引きて「亭遂<sup>テイ</sup>」に作る<sup>127)</sup>。『竹書』帝癸三十年「聆隧災あり」に作る。是れ其の字、<sup>レイ</sup>令に从ふか今に从ふか、定むべからず。而れば許書の此の篆或ひは後人偶たま此ここに記註する所の者ならん。

118)『大廣益會玉篇』卷4 耳部第五十五「麤, 美為、亡彼二切, 說文云, 乘輿金馬耳也」。

119) 澤存堂本『廣韻』に「麤」は三音あり,『玉篇』にある二音では、五支・麤(麤為切)小韻に「麤, 乘輿金耳」,四紙・麤(文彼切)小韻には「麤, 乘輿金耳也, 又美為切」というが,『玉篇』に無い音、六脂<sup>緒</sup>眉(武悲切)小韻に「麤, 金飾馬耳, 又武卑切」という。

120) 十四篇上(41b)車部「較,車輪上曲鉤也」段注「各本作車騎上曲銅也,今依李善西京賦,七啓二注正,攷工記車人,……,戴先生曰,左右兩較,故衛風曰,猗重較兮,毛傳,重較,卿士之車,因詩辭傳會耳,非禮制也,玉裁按較之制,蓋漢與周異,周時較高於軾,高處正方有隅,故謂之較,較之言角也,至漢乃圓之如半月然,故許云車上曲鉤,曲鉤言句中鉤也,圓之則亦謂之車耳,……」。

121) 卷2。六臣注「綜曰,……,翠羽為車蓋,黄金以飾較也,古今注曰,車耳,重較,文官青,武官赤,或曰車蕃上重起如牛角也,……,較,車輪上曲鉤也」。

122)『集解』引く徐廣注。段注引用文の下に「文虎伏軾,龍首銜軛」。

123) 亡彼切は四紙・麤(文彼切)と同音,忙皮切は五支・麤(麤為切)と同音。注118 參照。

124) 周語上。今本(明道本、公序本)『國語』は「遂」を「隧」に作る。韋昭注「回祿,火神,再宿為信,聆隧,地名」。

125) 四庫全書本『國語補音』に「聆隧,音琴,禮疏引此文作黔,補音巨今反」。「巨今反」は「禽」と同音。

126) 「乃書對曰,臣聞之經傳,或得神以昌,或得神以亡」注。『左傳』莊公三十二年傳,昭公十八年傳疏も『國語』を引いて「黔隧」に作る。阮元校勘記に「案後漢書楊賜傳注引作黔今國語周語作聆與說文同回毛本誤向」(莊公傳)「盧文弼按本云,國語作於聆」(昭公傳)。

127) 卷18 辨物。今本は「遂」を「隧」に作る。



聃，安也<sup>(一)</sup>，从二耳<sup>(二)</sup>，

聃，安也，二耳に从ふ，

(一)「長笛の賦」に曰く「瓠巴柱に聃んず」<sup>128)</sup>と。

(二)會意。二耳の人の首に在るは，帖妥の至れる者也。凡そ帖妥は當に此の字に作るべし。「帖」は其の段借字也。丁帖の切，八部。『文選』注「説文，丁篋の切」を引く<sup>128)</sup>。

聃，駢耳私小語也<sup>(一)</sup>，从三耳<sup>(二)</sup>，

聃，耳に駢きて私かに小語する也，三耳に从ふ，

(校)「駢」，二徐「附」に作る。<sup>129)</sup>

(一)口部「聃」下に曰く，「語を聃く也」<sup>130)</sup>と。按ずるに二篆皆な會意。口を以って耳に就くれば則ち「聃」爲り。「聃」なる者は，己の二耳 旁に在り，彼の一耳 間に居れば，則ち「聃」爲り。『史記』魏其武安傳に曰く「乃ち女兒に效ひて聃聃耳語す」<sup>131)</sup>，韋曰く「聃聃は耳に附きて小語聲す」<sup>132)</sup>と。

(二)尼輒の切，八部。

文三十二<sup>133)</sup> 重五<sup>134)</sup>

## 臣部

𠂔，頤也<sup>(一)</sup>，象形<sup>(二)</sup>，凡臣之屬皆从臣。𠂔，篆文臣<sup>(三)</sup>，𠂔，籀文从𠂔<sup>(四)</sup>，

臣，頤也，象形，凡そ臣の屬は皆な臣に从ふ，頤，篆文の臣，𠂔，籀文𠂔に从ふ，

(校)「頤」，小徐「頤」<sup>135)</sup>に作る。小徐，「篆文臣」下に「從頁」二字有り，「𠂔」下に「臣」字有り。

128)『文選』卷18。李善注に「説文曰，聃，安也，丁篋切」。

129)十四篇下(7b)阜部「附，附婁，小土山也」段注に「玉篇曰，説文以附爲附益字，从土，此附作歩口切，小土山也，玉裁謂土部附，益也，增益之義宜用之，相近之義亦宜用之，今則盡用附，而附之本義廢矣」。十篇上(11a)馬部「副馬也，…，一曰近也」段注に「附近字今人作附，或作傳，依此當作駢」。

130)二篇上(19b)。段注に「耳部曰，聃，附耳私小語也，按聃取兩耳附一耳，聃取口附耳也」。

131)『繫傳』引く所は，「女兒」を「兒女」に作る。今本『史記』は「聃」を「聃」に作る。『索隱』に「聃，音女輒反，説文，附耳小語也」。

132)『集解』引く韋昭注。但し，『集解』も「聃」を「聃」に作る。

133)小徐は「三十二」を「三十三」に作る。

134)二徐は「五」を「四」に作る。大徐は「聃」の或體「聃」を載せないで「重四」になるが，小徐は「重五」である。

135)九篇上(7a)頁部「頤，面黃也」段注に「今則頤訓爲頤，古今字之不同也」。また「頤」字段注に「方言作頤，於説文爲假借字」。『方言』は卷10「頤，頤，頤也」。

（一）頁部に曰く「頤、頤也」<sup>136)</sup>。二篆轉注爲り。「臣」なる者は古文の「頤」也。鄭『易』注に曰く「頤中（原注記：句）は口車輔の名也。震下に動き、艮上に止まる。口車動き而して上り、輔に因りて物を嚼み以て人を養ふ。故に之を頤と謂ふ。頤は養也」<sup>137)</sup>と。鄭の意を按ずるに、口下を謂ひて「車」と爲し、口上を「輔」と爲し、口車輔三者を合して「頤」と爲す。左氏に云ふ「輔車相ひ依る」<sup>138)</sup>と。車部に云ふ、「輔は人の頤車也」<sup>139)</sup>と。序卦傳に曰く「頤者、養也」と。古へ名頤字眞。晉の枚頤は字仲眞<sup>140)</sup>、李頤は字景眞<sup>141)</sup>。「枚頤」或ひは「梅蹟」に作るは、誤り也。

（二）此の文當に横に之を視るべし。横に之を視れば、則ち口上、口下、口中の形俱に見る矣。與之切。一部。

（三）此れ篆文爲れば則ち「臣」古文爲るを知る也。古文を先にし篆文を後にする者は、此れ亦た「二」を先にし「上」を後にするの例<sup>142)</sup>、是くの如からずんば則ち「阨」篆附く所無き也。

（四）「臣」本と象形。籀文、篆文の如きは則ち𠄎に从ひ頁に从ひて而る後其の形に象る也。

𠄎, 廣頤也<sup>(一)</sup>, 从臣巳聲<sup>(二)</sup>, 𠄎, 古文阨, 从戶<sup>(三)</sup>,

阨, 廣き頤也, 臣に从ふ, 巳の聲, 𠄎, 古文の阨, 戶に从ふ,

(校)「廣頤」, 二徐「頤」に作る。

(一)「阨」各本「臣」に作る。今正す。許書篆文を主とする也。廣き頤を「阨」と曰ふ。引

136) 九篇上(4a)。段注「臣下曰、頤也、臣者古文頤、與此爲轉注」。

137) 頤「自求口實」『集解』引く鄭玄注。中華書局本『周易集解纂疏』は「頤」下に「中」字無し。『段注攷正』に「頤中、今雅雨堂本、汲古閣本、張氏惠言本、中、並作者」。

138) 僖公五年傳。杜注に「輔、頤、輔車、牙車」。

139) 大徐本は「輔、人頤車也、从車甫聲」（一篆一行本十四上21b）。配列も「轟」の前、車部の末。段注本は十四篇上(50a)車部に「輔、春秋傳曰、輔車相依、从車甫聲、人頤車也」。小徐本同じ。段玉裁は「人頤車也」四字を刪るべきだとする。段注に「小徐本箸此四字於甫聲下、與上文意不相應、又無一曰二字以別爲一義、知淺人妄謂引傳未證而增之也、面部既有𠄎頤也之文、則必不用借義爲本義矣、若大徐本移輔篆於部末、解曰、……、而無春秋傳曰輔車相依八字、輔非眞車上物、廁末似合許例、然無解於面部業有𠄎篆也、校許宜刪去四字」。

140) 通志堂本『經典釋文』卷1注解傳述人・尚書に「豫章內史枚頤、字仲眞、汝南人」。阮元本『尚書正義』卷1堯典「虞書」疏に「郡守子汝南梅蹟、字仲眞」。いずれも「頤」を「蹟」に作る。阮元校勘記は「梅蹟」（序、虞書、商書）に作る。

141) 『經典釋文』卷1注解傳述人・莊子に「李頤集解三十卷三十篇、字景眞、潁川襄城人、晉丞相參軍、自號玄道子、一作三十五篇爲音一卷」。

142) 一篇上(2b)二部「二、高也、此古文上、指事也、凡二之屬皆从二、上、篆文上」。二徐は「二」を「上」に作り、「上」を「𠄎」に作る。段注に「古文上作二、故帝下、𠄎下、示下皆云从古文上、可以證古文本作二、篆作上、各本誤以上爲古文、則不得不改篆文之上爲𠄎。而用上爲部首、使下文从二之字皆無所統、示次於二之指亦晦矣、今正上爲二、𠄎爲上、觀者勿疑怪可也、凡說文一書、以小篆爲質、必先舉小篆、後言古文作某、此獨先舉古文後言小篆作某、變例也、以其屬皆从古文上、不从小篆上、故出變例而別白言之」。

申して凡そ廣きの併と爲す。周頌「昊天有成命」の傳に曰く「緝は明也，熙は廣也」<sup>143)</sup>と。「熙」<sup>144)</sup>は乃ち「阨」の段借字也。「熙」は「火」に从ひ，其の義「燥」と訓じ，「廣」と訓ぜざる也。毛傳「文王」に於いて曰く「緝熙は光明也」<sup>145)</sup>と。「昊天有成命」の傳と同じからず。而して「敬之」の傳に曰く「<sup>クワウ クワウ</sup>光は廣也」<sup>146)</sup>と。然らば則ち「光」は即ち「廣」，二傳の義本と同じ<sup>147)</sup>。鄭箋「廣は光字の誤り爲り」<sup>148)</sup>と云ふが如きを得ず。周の内史『周易』を説きて曰く「光，(原注：逗)遠く而して他自り耀くこと有る者也」<sup>149)</sup>と。然らば則ち「光」は即ち「廣」なること知る可し。『大戴禮』に「積むこと厚き者は<sup>ひろ</sup>流光し」<sup>150)</sup>，即ち「流廣し」也。「釋詁」「緝、熙は光也」<sup>151)</sup>，即ち「周語」叔向云ふ所の「緝は明，熙は廣也」<sup>152)</sup>。毛公兼ねて之を取りて傳を爲る。學ぶ者は宜しく其の會通を觀るべし。凡そ詁訓は之を<sup>わか</sup>析ちて至って細かき者有り，之を通じて甚だ寛き者有り。學を好みて深く思ひ，心に其の意を知るに非ざれば，其の理を盡す能はざる也。「熙」，「廣」と訓じ而して「熙」は乃ち「阨」の段借，然らば則ち古經の「熙」字「阨」に作る可き者多し矣。○「文王」毛傳に曰く「緝熙は光明也」と。此れ「釋詁」に係り而して必ず兼ねて「明」を言ふ者は，叔向の語と相ひ違はざらんと欲する也。「昊天有成命」の傳直だ叔向の語を用ふる者は，叔向固より此の詩を釋するを以て也。「敬之」「緝熙于光明」の傳に「光は廣也」と曰ふ者は，「緝熙」既に「光明」と訓ずれば，則ち「光明於光明」，文理通じ難きを以て，故に此の「光」，「廣」と訓ざるを必する也。然らば則ち「文王」，「敬之」は「熙」を「光」と訓じ，「昊天有成命」は「熙」を「廣」と訓ず。未だ嘗て之を析ちて甚だ細かからざらばあらず矣。

(二) 與之の切，一部

(三) 按ずるに此れ古文「戸」に从ふ，疑ふらくは當に「尸に从ふ」に作るべし。凡そ人體の字は多く「尸」に从ふ。當に「戸」に从ふべからざる也。「顧命」に「兩階の阨を夾む」某氏

143) 「於緝熙」傳。

144) 十篇上 (53b) 火部「熙，燥也，从火阨聲」。段注は「阨」字注も引く『爾雅』釋詁、『毛詩』「昊天有成命」「文王」「敬之」の傳等を引いて「是古光廣義通，燥者熙之本義，亦訓興訓光者，引申之義也」といい，「熙」が「廣」と訓じられるのを假借としない。「熙」は「許其切，一部」。

145) 大雅。「於緝熙敬止」傳。

146) 周頌。「學有緝熙于光明」傳。

147) 十篇上 (51b) 火部「光」は「古皇切，十部」，九篇下 (14a) 宀部「廣」は「古晃切，十部」。聲調が異なるのみ。

148) 「昊天有成命」箋に「廣當為光，……，字之誤也」。

149) 『左傳』莊公二十二年。

150) 禮三本。中華書局『補注』本、『解詁』本はいずれも「流光」を「流澤光」に作る。『史記』禮書、『荀子』禮論篇は「流澤廣」に作る。

151) 釋詁上。

152) 周語下「晉羊舌肸聘于周」章。「昊天有成命」の「於緝熙」の解釋。今本『國語』は「明」下に「也」字が有る。

云ふ「堂廉を𡗗と曰ふ」<sup>153)</sup>と。『廣雅』に云ふ「𡗗、切也」<sup>154)</sup>と。此れ堂邊の圻墉、人の下頷の廣闊たるに象たるに因り、故に借りて以て名と爲す。而して牀史の切に讀む<sup>155)</sup>。○又た『九經字樣』<sup>156)</sup>を按ずるに、『說文』「𡗗」に作り、經典「𡗗」に作ると云ふ<sup>157)</sup>。然らば則ち今本『說文』は唐時に異れる也。然らば唐時已に戸に从へば則ち亦た誤れり矣。

文二 重三

本稿は、JSPS 科研費 JP18K00349 の助成を受けたものである。

---

153) 偽孔傳。

154) 釋宮。『疏證』本は「切」を「砌」に作る。王念孫は「砌、古通作切」という。

155) 『博雅音』に「𡗗、仕已、口音士」。「仕已」と「牀史」は同じく牀母止韻。

156) 『新唐書』藝文志一・甲部經錄・小學類に「唐玄度九經字樣一卷（文宗時待詔）。『舊唐書』文宗紀・開成二年「冬十月辛卯朔，…，癸卯，宰臣判國子祭酒鄭覃進石壁九經一百六十卷，時上好文，鄭覃以經義啓導，稍折文章之士，遂奏置五經博士，依後漢蔡伯喈刊碑列于太學，創立石壁九經，諸儒校正訛謬，上又令翰林勒字官唐玄度復校字體，又乖師法，故石經立後數十年，名儒皆不窺之，以為蕪累甚矣」。

157) 雜辨部「𡗗𡗗，音俟，上說文，下經典相承」。